

を設けざるべからざるに、之は其建設并に維持に於て非常なる困難を伴ひ、而かも其價值少きことは既に周知の事實である。今や新條約により成りし各民族の國家の境域は、多くはこの人工的境界を有せんとして居る。ポーランドの如きは殆んど其の全國境はこの人工的境界線を設定せざるべからざるに、其長さ恐らくは殆んど千五百哩に達せんとしつゝあるのである。この廣大なる無障礙の國境は果して永久に維持せらるゝものであらうか。たとへ國際聯盟あつて民族間の争鬭を或程度迄は防ぎ得べしとしても、この境界を越えて出入

白馬寺の沿革に關する疑問

文學士 那 波 利 貞

後漢の明帝が金人を夢み、傳毅の奏上に聽きて佛徳の偉大なるに感じ、即ち蔡愔等十餘人を迎佛

する民族の流れを阻止することは到底不可能である。されば再び新らしき民族問題が起つて、領土の變更を見るべき事は火を賭るよりも明かである。

茲に於て吾人は對獨條約及他の新條約が餘りに民族の統一に重きを置き、地理的關係を無視せし事は、却つて將來に於ける民族的争鬭の種子を蒔きしものと信せざるを得ないのである。

本稿を草するに當り使用せし對獨講和條約書は我政府より未だ發布なきにより専ら紐育タイムス社發行 Current History 八月號所載の正文に據る。

使節として西域地方に派遣し、幸に大月氏國にて

佛像佛經并に西域の沙門なる攝摩騰、竺法蘭の二人を得て、洛陽の西郊に白馬寺を創立せし話は、

普通には支那に於ける佛教傳來并に佛寺建立の權輿として人口に膾炙するものなるが、専門學者の間に於いては之に關する幾多の疑問と異説とありて、論難致證の研究の結果は夙に相當多量に致されて、甲論乙駁殆んど底止する所を知らない。併し實際此の話は信據するに足るべき根本史料の僅少なる爲自ら幾多の疑問續出して其の確實なる事實の真相は殆んど知り得べからざることゝなつて居る。然りと雖も此の問題は洵に支那文化史研究の立脚地より觀れば最も注意研究を致さるべからざる一大事件にして、若し假に傳説の語るが如くんば、單に印度思想の支那民族に及ぼせる影響如何てふ思想史上の問題として重大なる意義あるのみならず、其の將來せし佛像が支那鑄金界支那彫刻界に及ぼせる影響、寺壁に千乘萬騎遠塔三匝圖の作られたる爲、其の支那繪畫界に及ぼせる影響、佛典翻譯より促されたる外國語習學の機運の

起りしならむ等、つまり西域乃至印度文明の輸入せられたる爲に支那の思想界、學術界、美術工藝等諸方面に及ぼせる影響は果して如何なりしかてふ諸點に於いて、此の白馬寺問題は實に支那佛教史上の重要な研究問題たるのみならず、寔に支那文化史研究上看過するを許さざる有意義の研究問題である。茲に吾人が所題の如き本篇を草し先輩博雅の研究に蛇足を加へて吾人の抱懷する四五の疑問を提出し、以て識者の示教を請はむとする所以も亦此の立脚地よりする必要に迫られたる結果に外ならぬ。

二

大體支那史上に於いて白馬なる寺名を有せる僧院は只今迄の吾人の寡聞に知れる限りに於いては四箇寺ある。今其の草創年次の遅きものより順次列擧するに、其の一は『畿輔通志』に見ゆるもので宋の徽宗の崇寧年間（西曆一一〇二—一一〇六年）

に直隸省大名府の城内西南隅に作られたるもの、其の二は『河南通志』に見ゆるもので唐の太宗の貞觀元年(西曆六二七年)に河南省の扶溝縣の某地點唐代には侯謝岡と呼ばれし地に建立せられしもの、其の三は『畿輔通志』に見ゆるもので完縣の東八里に建てられ、其の草創年次は今日にては不明なるも、隋の孔德紹に「遊北平白馬寺詩」一篇あれば、其の既に隋代に存在せしことの明なるもの、而して其の四は後漢明帝が河南省河南縣の西郊に創建せしと傳へらるゝものである。此等四者中、前三者が何れも明帝の創立と傳へらるゝ白馬寺の名を襲ひたるものなるは勿論申す迄も無からう。

然り而して明帝の迎佛に關する史料は實に僅少にして、外典に在りては僅に『後漢書』西域傳、『後漢書』楚王英傳注所引の晋の袁宏の『後漢紀』、『魏書』釋老志の數種であり、尙『後漢書』襄楷傳にも佛敎に關する記載はあるも併し茲にては直接の關

係を有しては居らぬ。内典に在りては梁の慧皎の

『高僧傳』、隋の費長房の『歷代三寶記』、宋の祖琇の『隆興釋敎編年通論』、宋の本覺の『歷代編年釋氏通鑑』、宋の志磐の『佛祖統記』、元の念常の『佛祖歷代通載』、明の覺岸の『釋氏稽古錄』及び『釋氏通鑑』に引用せられたる『釋記』、『漢法本內傳』と『三藏記集』序卷に見えたる『四十二章經序』等存し、併せて有名なる『開元釋敎錄』がある。然も此等書籍の本文の史料としての價値如何てふことは、此の問題の研究に當りては先づ吟味すべき重要事項であるが、前掲の外典の諸書は袁宏の『後漢紀』を除くの外は所謂正史なれば比較的根據するに足るべく、又根據せざるを得ないのである。但し一つ注意を要すると思はるゝは『魏書』釋老志にして、北魏時代の胡太后の尊佛は申すに及ばず、南北朝時代は概して佛敎隆盛時代なれば、此の書の記載には或は幾分佛德を過賞し、其の事情を誇大せる

傾向があるかも知れないから、『後漢書』など、同日に觀ては或は危険が存するかも知れないと思はれる。併し先づ正史なる以上は内典の多くが佛教徒の我田引水の誇張の記載を以て満たされ居る程のものにはあらざるべしとも思はれる。之に反して内典は多くは佛教徒の誇張的記載のものであるから、此の點は深愼なる批評眼を注ぐ必要あり、尙内典の中にも慧皎、費長房、祖琇、志磐諸僧の記述は佛教史専門家の方にも比較的信すべき史料と考へられ居れる如きも、其の他のものは比較的後世の編纂物なると共に附屬の説多く、根本史料として信據するにはあまりに薄弱なるもので殊に『漢法今内傳』や『四十二章經序』の取るに足らざる後世の偽書たるは既に定説あり、今更縷々の證言を要せざることである。

三

使者派遣の動機に就きては信據するに足るべき

證左は無く、金人を夢みたる話は楚王英傳注所引の晉の袁宏の『後漢紀』に見ゆるを其の最初とすれば、梁の慧皎の『高僧傳』や『魏書』釋老志の記載は皆袁宏の記載を襲用したる迄に過ぎないであらう。かくして金人を夢みたる話は勿論一個の傳説で蓋し後漢末より三國の交にかけて假作せられたものならむと思はるゝが、唯其の夢の話を群臣に問ひし時傳毅が印度に於ける釋尊降誕の終始と佛徳とを述べし話は比較的注意に値することではあるまいかと思ふ。

大體支那へ佛教の傳來せし起原に就きては其の主なるものは普通に五説ありて、學者熟知の如く其の一は『佛祖統記』に基く秦の始皇の四年(西曆紀元前二一八年)説、其の二は『魏書』釋老志に基く前漢の武帝元狩二年(西曆紀元前一二一年)説、其の三は今傳らざる劉向の列仙傳に基く前漢の成帝時代(西曆紀元前三二年—七年)説、其の四は『三

國志』注所引の『魏略』西戎傳に基く前漢の哀帝の元壽元年（西曆紀元前二年）説、其の五は今茲に述ぶる後漢明帝永平年間（西曆五八―七五年）説である。此等の中何れが事實なるかは學者論争の種となるが、吾人は漢土と西域及び印度方面との交通并に他の二個の理由より廣義に於ける佛教の支那傳來は必しも明帝の使者派遣に始まらざることを見するのである。此に就いては先づ公的傳來と私的傳來に分類して考察するの必要あらむと思惟せられ而して第一説は室利房等の自意發動的に支那に來りし話であり第二説なる霍去病の得たる金人は『史林』第三卷第四號所載の文學士羽溪了諦氏の「休屠王の金人に就いて」なる研究に従へば、佛像には非ずして西域の天神となり、佛教傳來問題と殆んど關係無きともなる譯であるが、假に從來の説の如く此を佛像なりと觀ても勿論私的傳來となる譯である。第三説も亦劉向校書の際に佛

典ありしと謂ふ迄で假に之をも事實なりと觀ても其の傳來は成帝よりも前にやはり私的に流傳せしものと觀ざるを得ず、又第四説も博士秦景憲が大月氏の使者より個人的に復立經を口授されたるなれば、假に之をも事實として信憑しても、やはり私的傳來となる譯である。之に反して傳説ながらも公的に佛教の支那に傳來せしと思はるゝは如何しても明帝の使者派遣に據るものと觀ざるを得ない。

漢土と印度方面との交通は比較的古くより相當に在りしものならむと思はれ、たとへ直接交通ならずとも、西域諸國を通じての間接的交通は印度の事情を比較的古く支那人に知らしめたるものと思はるゝ。況んや前漢の張騫が西域遠征の目的地なりし大月氏を中心とする中央亞細亞地方は、阿育王以來印度の感化は比較的多く及び居りしのみならず、別して大夏と身毒との交通の頻繁なり

しは『史記』大宛傳の語る所であり、張騫が烏孫に
使せし時には其の副使を大夏、安息、身毒諸國に
も派して居つて歸朝の際に身毒の様子などを武
帝に奏上し居れば武帝時代の支那人は比較的能く
印度を知り居りしと共に、張騫が大夏の市場にて
蜀の華竹杖や蜀布の販賣せらるゝを見之を質問せ
しに大夏は東南數千里の身毒即ち印度より得たり
と謂へば當時私的交通の巴蜀地方即ち今の四川省
地方と印度との間に相當に存したるものなるべき
を推想し得られ、又『西京雜記』に記載せらるゝが
如く漢の宣帝が身毒の寶鏡を平常懷中せしとあれ
ば、西域を通じての間接交通は勿論、四川地方よ
り行はれたりと思はるゝ所の直接交通を以てして
も、印度と支那との交通關係は私的交通に依りて
少くとも前漢時代には既に相當に存したるものと
推察せられ得るから、佛教思想の如きも何等かの
機會を得て此の私的交通の爲に比較的早く支那に

傳來せるものと思はれて、少くとも前漢中葉以後
より成帝哀帝の頃に至る間には之が支那に傳來し
又は傳來し居りしものに非ざるなきやを疑ふ次第
である。即ち明帝の勅問に答へたる傳毅が比較的
詳細に釋尊降誕并に佛德に就いて正確なる知識を
有せし様解せらるゝも此の理由に基く結果には非
ざるなきやと考へらるゝのみならず、尙注意を拂
ふべき傳説が今一つ存して居るらしくそれは所謂
白馬寺の成就後に明帝が一度此處に行幸せられ攝
摩騰、竺法蘭と會話せられたる時に攝摩騰が質問
して此の建物の東なるは何館ぞと尋ねし時帝の答
へたる語として

昔有阜無因而起、夷之復然。夜有光怪。民呼爲
聖塚。因祀之。疑洛陽神也。

なる話の『釋教編年通論』に見ゆることである。之
に對して攝摩騰等が之を以て阿育王の八萬四千の
塔の一個なる説明を下し居れるは勿論信憑するに

は足らぬが、此の聖塚の傳説を一概に後世附會の妄説と觀ればそれ迄ではあるが、仍疑へば疑ひ得る餘地が存するには非ざるなきやを思ふのである。吾人は公的の佛敎の支那傳來は明帝の使者派遣に初まると考ふるも、其の私的流傳は叙上の理由に基きて少くとも前漢末には既に存せしものと想像する者にして秦代室利房來朝のことは暫く之を指し置きても、前漢の中葉以後或は一二西域僧侶の暗々裏に間行して支那に來りし者あらざるなきやを疑ふのである。漢の武帝が神仙を好みたる結果方士の勢力を得たのは申す迄も無い。此の風潮は武帝以後連續して後漢に入りても衰へず、即ち攝摩騰等の迎へられて來りし時にも五岳の道士褚善信等七百餘人が公式に外來僧侶に對し將復佛敎に對し排斥運動を試みたることは當年の情勢上當に然るべきことにして、其の抗表や與沙門竺法蘭比校の記事の『法苑珠林』卷六十八、『廣宏明集』一に

見ゆるものが果して褚善信等の執筆に係りし原文なるや否やは明白では無いが、此の種の排斥運動の有り此の種の抗表などの有りしことだけは略推知するに難く無い。然り而して漢の武帝以後此の時に至る間の方士の勢力は洵に強大なるものありしことは正史の記載する所なれば、前漢末期成帝哀帝の時代に既に私的交通によりて或る程度迄支那に流傳爲し居りしと思はるゝ佛敎に對しても、當時の方士の徒が相應に排斥的態度を取りしことも想像せられ得らるゝ。此の見地より觀察すれば前漢中葉以後に或る程度まで支那に流傳せし佛敎が黃老神仙家の一派の爲に豫想以上の非常な壓迫を蒙り、一二間行渡來の西域僧侶などありても其の佛敎徒佛敎宣傳家たるの旗幟を鮮明するは非常な不利益にして、且つ實は爲し得べからざりしものならむかを疑はれ得れば、此等間行渡來の西域僧侶は暗々裏に極めて少數の支那人に密々に佛敎

を宣傳するに留まり、其の之を信仰する小數の支那人も亦其の呼吸を心得て、猶我が徳川時代のジエスイット教信者が名を佛敎の子安觀世音に藉りて實は秘密にマリヤ抱子像を祭祀禮拜せしが如く當時に於ける流行力の盛大にして而も或る點に於いて其の思想の酷似せるものなる黃老神仙說に名を藉りて密々に之を信仰禮拜したるものならざるなきやを疑ふのである。従つて此等一二の西域より渡來せる僧侶も亦、表面のみは何等佛敎徒佛敎宣傳者たる體裁を裝はずして巧に黃老神仙家の鋭鋒を回避したるものと觀察なし得らるれば、前漢の中葉以後より後漢明帝時代に至る中間の其時代に支那に渡來せし此等一二の間行僧侶の死するに及びては、其の埋葬終焉の事業の如きは一部小數の支那佛敎徒の手に據りて密々に行はれたるならむとも考へ得られ、旁之が明帝の答へたる所謂聖塚の下に永に眠れる本體ならざるやを疑ひ得られ

はずまいかと思ふ。但し若し假に吾人が想像するが如きことありしとするも、此が洛陽神と稱呼せられたることと説明が附し得らるゝので、蓋し右の事情の爲に明帝時代に至りても其の外來佛敎僧侶の墳墓たることを明言することは其の一味の者共には可及的避けたりと思はるれば、一般には唯不可思議なる墳墓として考へられ即ち聖塚の名も自然に起り又洛陽神とも稱呼せられ、又一部其の來歴を知悉せる支那佛敎徒も故意に洛陽神と稱して密々に祭祀禮拜せしものならむかと考へ得られ此の聖塚問題は或る點迄は疑へば疑ひ得らるゝと思ふ。つまり其の吾人の根據として採用する所は薄弱にして従つて其の結果も亦一個の推想たるに留まると雖も、吾人は少くとも前漢中葉頃より既に或る程度迄佛敎は私的交通によりて支那に傳來し居り、而も時勢の然らしむる所已を得ず黃老神仙說の假面を被り其の陰に隠れて密々に一部支那

人士の間に信仰せられ居りしにあらざるなきやてふ疑を起さしめらるゝのである。斯く解釋し來れば明帝の使者派遣の動機の如きも決して金人を夢

みたるが如き假作話のものにはあらずして、相當に佛敎に關する知識有りしことゝて少くとも數年の熟慮の結果之を斷行せしものと考へ得らる。然れば使節派遣に先ち傳敎が既に釋尊并に佛敎に就きて相當一通の知識を有し居りしことも解釋が附し得らるゝ譯で、兩々相關的に妥當な説明が爲し得られはすまいかと思ふ。此の佛敎の私的傳來が少くとも前漢中期より末期の間に在りしならむと謂ふ點に於ては G. F. Moore 氏が History of Religions p. 89 に於て

We have other ground for believing that, through trade with India and Chinese military expedition to the westward, the Chinese had come into contact with Buddhism as early as the

second century B. C.

と謂へるは當に吾人の意を得たる見解なりと思はれるのである。

四

吾人は露西亞のワシリフ氏の如く明帝の迎佛始末並に二沙門の渡來を以て全然後世の佛敎徒の假作附會に出づるものと見る説は取りたくなき者で支那へ公的に佛敎の傳來せしは如何しても明帝の使節派遣に始まり二沙門の來朝も亦歴史事實なりと思惟する者であるが、獨普通の意味に於ける僧院なる白馬寺建立のこのみは遂には信じ難いと思ふのである。諸種の史料と傳説とを綜合して知り得る所は、二沙門の渡來するや即ち先づ之れを鴻臚寺に賓客として待遇し、次で間もなく洛陽西雍門外に白馬寺を建立して此處に居らしめ、而して佛像は之を清涼臺、顯節陵に安置し、經文は有名なる蘭臺の石室第十四間中に緘藏せしめたりと

謂はるゝのであるが、白馬寺なる寺院建立のことは正史の上にては一も記載する所無きは果して如何したのである歟。斯の如き史上の重要事項を范曄が後漢書撰述に當り看過省略に附するとは到底考へ得られざることで、此の間必ずや何等かの事情が伏在して居るものと觀察せなければなるまい。然も所謂白馬寺建立に關する内典の傳ふる所も諸説區々にして永平十年説、十一年説、十二年説あるなど非常な空漠たるものであるから、勢此の問題を論ずるには先づ使者の出發并に歸朝の年次より研究せなければ到底不可能事である。然るに悲しいかな使者歸朝年次も亦異説紛々として之を知るを得ず。即ち『佛祖歷代通載』の如きは永平七年説を立て、之に反して『釋氏通鑑』所引の『漢書』は八年説であり、『歷代三寶記』は十年説、『釋教編通年論』は十一年説である。然るに『釋教編年通論』は出發年次を永平七年(西曆紀元六四年)と

し、『釋氏通鑑』は永平六年(西曆紀元六三年)に既に使者一行の大月氏國に到達し居りしことを誌せるも、正史の上にては何等の記載もなく、『高僧傳』は單に永平中(西曆五八―七五年)とあるばかりで、つまり出發年次、歸朝年次共に不確實であるが、唯八年歸朝説は諸書の記載と他の事情とより觀て理論上穩當ではあるまいかと思ふ。否精密に謂へば七年歸朝説を成立せしめ得らるゝのではあるまいかと思はれる。即ち『佛祖歷代通載』は勿論元代の編纂物ではあるが、其の歸朝年次を永平七年十二月三十日とせることは他の『歷代三寶記』『開元釋教錄』等の記載と大した衝突を起さざる底の記載で、年末に歸着した結果は八年説の生ずるも可能事で、之より觀れば『釋氏通鑑』に永平六年は既に使者一行の大月氏國に到達し居りしと謂ふ説も説明が附し得られ、且つ所謂白馬寺に在りて二沙門が永平十年に四十二章經一卷を(譯記)十一

年に竺法蘭が佛本行經を（歷代三寶記）、十三年に十地斷結經を（釋教錄）、十六年に又二經と合計五部十三卷を譯出せしと謂ふ『歷代三寶記』や『開元釋教錄』等の諸記載の年次とも齟齬せざる説明が下

し得らるゝから、此等根據として信據するは薄弱なる諸記載より考へ得らるゝ使節一行の歸朝年次は、薄弱なる結論ではあるが蓋し永平七年の歲の暮か、又は八年の年初なるべしと觀られ得ると思はれる。然り而して『後漢書』楚王英傳に見ゆる所に據れば、二沙門の渡來せし爲に永平八年に伊蒲塞等の爲めに布施を行ひしとあれば、これは蓋し使節一行と同伴せし攝摩騰、并に少し遅れて渡來せし竺法蘭の二沙門が永平八年の或る頃には相並びて明帝の優遇を受けたる結果、此の擧の行はるるに至りたるものには非ざるなきやと推測せられ旁以て、吾人が推想の使節歸朝年次は圓滑なる説明を附し得らるゝ譯となるものではあるまいかと考

へる。仍若し此の推想説より説明せむか、攝摩騰の入寂は永平十六年と傳へらるゝ故支那に渡來後九年目に長逝した譯である。

吾人は前述ぶる如く使節の派遣沙門の渡來を以て歴史的事實ならむと解釋せむと欲する者なるが別して楚王英傳の伊蒲塞に布施を行ひし話などより二沙門の渡來事件の當時の有識者間に好話柄を作りしものと考へらるゝ。併し『後漢書』の記載の上にて明瞭に知り得らるゝことは殆んど迎佛使節を派遣したることのみに留りて、白馬寺創立のことは全く見當らない。而して此のことの初めて記載せらるゝものは『魏書』釋老志及び佛敎隆盛を以て有名なる梁の慧皎の『高僧傳』であることは蓋し注目すべきことである。洵に其の『後漢書』に白馬寺創立の記載なきは訝しき限りで大體白馬寺の創立存在事情は、洵に前夜迄其の建物の存在せざりし地點に朝霧の間に忽然として朦朧たる殿宇の影

を出現し、日中に及びて人皆其の實在を認識したるに係らず、夕の煙に籠められ再び朦朧たる夕闇の間に永久に没し去りしが如きもので、實に不可思議な存在であるが、吾人は之に對して次の如き疑問を發せざるを得ないのである。

蓋し二沙門の爲に一構の殿宇を建立せしは歴史的事實ならむも當時直に白馬寺と命名又は稱呼されしや否やは疑ふべきであると思ふことである。此の殿宇の建築は吾人の推想を以てすれば永平八年中より起工されたるものと考へ得らるゝが、相當の建築なれば一個年位の日時は要せしなるべく而して佛像は清涼臺に安置せられ佛經は蘭臺石室に緘藏せられたるなれば、殘る所は單に二沙門を客遇し經文を譯出せしむべき殿宇の必要のみである。然れば洛陽の西郊に作られたる一構の建築は結局明帝が二沙門を客遇し置きて經文翻譯事業に従事せしむべき一個の客館で、之に其の趣味生活

の便宜を興ふる爲多少印度乃至西域式の意匠を用ひたりと思はるゝ所の謂はゞ鴻臚寺の分館の如きものならざりしや否やを疑つて試たい。實際後漢時代の記録上には此の建築に大佛像を置き諸人の參拜燒香せし話は一も見當らざるものなれば、蓋し當時は白馬寺など命名又は稱呼せられたるものにあらざりしならむと疑はれるので、つまり今日の意味に於ける寺院では無かつたものと推想し得る餘地が存すると思はれる。『後漢書』に既に白馬寺命名の記載全然これ無き以上は、斯く解するより外に致しかたは無からう。尤も將來これを寺院とする意志の明帝の胸裏にありしや否やは不明であるが、蓋し輿論の是非を觀察し、佛敎の公的輸入が民心に逆ふ様なこともなければ、追々と今日の意味に於ける寺院とする方寸の有りしとは、其の祭祀禮拜の習慣にも合する様に、其の建築樣式に後に説くが如く印度式乃至西域式を加へたり

と思はるゝことに依りても略々推知せられ得はず
まいかと疑はれる。

然らば何代より白馬寺と稱呼せられたかと謂ふ
に其の寺名の記載の見ゆる最初は正史の上にては
『魏書』釋老志であり、他のものでは北魏の楊銜之
の『洛陽伽藍記』なれば、北魏時代にかく稱呼され
居りしことだけは確實なれば、つまり後漢中葉以
後より三國西晋に互る間に何時か斯く命名せられ
たるならむてふことだけは知られ得ると思はれ
る。

五

かくして吾人の卑見を以てして創立頭初は單に
二沙門客遇の爲の客館で、其の後、後漢中葉以後
より三國西晋に互る間に白馬寺と稱呼さるゝに至
りて遂に今日の意味に於ける寺院となりし此の建
築物が創建當初の様子は吾人の寡聞未だ之を詳細
に知るべき好史料を發見して居らない。併し『魏

書』釋老志には

宮塔猶依天竺舊狀而重構之。從一級至三五七九
世人相承謂之浮圖。

とあれば殿宇の外に印度式と目せらるゝ飛塔を建
てしことが解るが、之が明帝時代に建立されしか
將又白馬寺と稱呼されて純粹の寺院となりし時に
建立せられしかは不明なるが、少くとも北魏時代
の白馬寺が塔を有する一構の建築なりしことだけ
は明瞭であり。又『洛陽伽藍記』の記載に徴すれば
明帝より大凡四百四十年を経たる北魏時代に仍
後漢代の經函の保存せられたる様見ゆるも、之等
は蓋し後漢中葉以後の某時代に及び始めて純粹寺
院とせられて白馬寺と命名稱呼せられし以來の設
置ならざるやを疑つて試みたい。其の經函に就いて
は明瞭確實に明帝時代のものと言ふ記載は見當ら
ない様で『魏書』韓賢傳には

其經函形製古樸。世以爲古物。歷代寶之。

とあり。『洛陽伽藍記』には

寺上經函至今猶存。常燒香供養。經函時放光。

明耀於堂宇。是以道俗禮敬之。加仰真容。

とあるばかりである。唯其れ北魏時代の様子に至りては、同じく『洛陽伽藍記』に

浮屠前奈林蒲萄。異於餘處。枝葉繁衍。子實甚大。奈林實重七斤。蒲萄實偉於棗。味並殊美冠於中京。

とありて、蒲萄等の如き外國傳來の果實花卉類が植えられ比較的外國色彩の存したるは、猶今日日本の耶蘇教會堂に西洋花を植えて西洋色彩を添えたるが如きものなりしならむと想像せらるゝが、之も果して明帝以來の施設なるか、其後の某時代の施設なるか其の點は今日の處勿論明確に窺知するを得ないが、少くとも北魏時代には然りしなるべきを信するに足ると思ふ。而して右の所謂奈林なるものは塗林と同一のものならむと考へられ塗

林は西晋の陸機の『與弟雲書』中に、「張蕊爲漢使外國十八年。得塗林安石榴也」の句ありて Lacouperie 氏は之を以て地名 *Tamnia* の音譯と認め居るが、桑原先生は『續史的研究』所載の論文「張蕊の遠征」中にて此の事に論及せられ次の如く謂はれて居る。

Tamnia は陸機の句を得塗林。安石榴也。と解して塗林を梵語で石榴を意味する *Darim* の音譯

と認めて居る。この解釋の方が妥當かも知れぬ。吾人は此の説に基きて塗林を石榴の梵語 *Darim* の音譯と見ると共に奈林も亦然らむと解する者である。蓋し奈は那に通じ *Da* なる音をも有するものなるは容易に推知せられ得る故、北魏時代の白馬寺飛塔前に蒲萄と共に外國植物として其の偉大なるを誇りし奈林は石榴ならむと考ふるもので、當時京師の通語に

白馬甜榴。一實直牛。

なる評判ありしを思へば益々其の然るなるを信じ得らるゝと思ふと共に、益々北魏時代に於ける白馬寺の境内の様子の非支那式なりしことを知り得らるゝと思ふ。

仍白馬なる寺名は白馬に經を積み歸りし爲と謂はるゝも、吾人の卑見を以てすれば建立頭初は白馬寺の稱呼は無かりしものにして後漢中葉頃より西晋の間の何代頃かに佛教徒によりて附せられたるものと思はるれば、蓋し西域の或る王が招提寺破壊に際し夜中一白馬の靈驗ありしと謂ふ傳説により命名せしもので、明帝派遣の迎佛使者の經を積み歸りし白馬に因むとの説は妥當ならざる様疑ひ得る餘地あらむと思ふ。

六

然らば北魏時代に確實に存在せし白馬寺が何代頃迄存在せしかと謂ふにこれ亦明確な史料は殆んど見當らない様で、吾人は少くとも南北朝時代の

末期には既に荒廢湮滅に歸して居つたものではあるまいかと疑ふ次第である。勿論其の積極的證據となるべき好史料は見附からざるも前に謂へる如く隋時代に所謂北平の地に白馬寺の存在あり、又唐の貞觀元年に本來の白馬寺に程近き同く河南省の扶溝縣附近に白馬寺の建立せられたる如き記載の残れるは消極的史料ではあるが傍證にはなると思はれ、有名なる傳説を有する白馬寺の尙存在せる時に、直隸地方に同名の寺院あるは既に不可思議であり、況んや本來の白馬寺と程遠からざる河南省に同名の寺院が唐の貞觀元年に建立せられたるも益々不可思議な譯で、こは蓋し本來の白馬寺の少くとも既に南北朝末期には存在せざりし爲、其の由縁ある古刹の名を保存するの目的より其名を襲ひたる新寺院を建立したるものならざるやと思はれる、若し吾人が此の消極的證據を是認するならば、本來の所謂白馬寺は少くとも南北朝時

代の末期には既に湮滅荒廢に歸し居りしものと解釋するより他に適當なる説明が附し得られまいと思考せらるゝのである。尤も『釋氏通鑑』には吾人の卑見を否定せむとする記載ありて、太宗皇帝題白馬寺詩一首とて左の詩を引用録して居る。曰く

門徑蕭々長綠苔。一回登此一徘徊。青牛謾說幽關去。白馬親從印土來。欲定是非憑烈焰。要分

眞僞築高臺。春風也解嫌狼藉。吹盡當年道教灰。

『釋氏通鑑』は申す迄も無く宋の本覺の撰述に係る書籍なれば、従つて此の詩は唐の太宗の御製と觀なければならず、太宗が之を製せし時に本來の白馬寺の現存せし譯となるものである。又『河南通志』卷五十にも

白馬寺○中略永平十年創建。宋淳化元至順間。俱

敕修。明洪武二十三年重修。

ともありて、此等の記載より觀れば本來の所謂白馬寺は一度も荒廢湮滅せざりし如く觀ざるを得ざ

るが、之は蓋し粗漏なる引用法と記載となるべく吾人は前の理由によりて其の南北朝末期には既に荒廢に歸し建築物も喪失し居りしもので『河南通志』の記載の如きは或は唐末以來の舊位置に再建せられしものを敕修せしことを謂へるものならざむかと疑はれる次第である。

七

元來白馬寺に關する史料は既に其の量に於いて僅少なるのみならず、又其の質に於いても多くは不確實なるものなれば、此の二個の缺陷の爲に今日に於いては堅實なる研究の結果も齎らすことは到底不可能事ならむと考へられる。それで叙上吾人が論述する所も多くは所謂臆説にして、元來基礎薄弱なる根據の上に立ちて立説したるものなれば洵に空中架樓の結果を得たるに過ぎない。併し支那文化史研究の上より注意すべき一大事件たる白馬寺問題は將來益々研究致すべき必要があら

うと思ふ。今茲に吾人が得たる空中架樓の結果は單に各史料の記載を成る可く齟齬衝突せしめざる範圍に於いて試みたる想像的結果で、勿論學術的研究の結論と觀ることは出來ないと思はるゝが、つまり卑見より生ずる白馬寺の沿革に關する疑問として提出するに左の諸項が列擧爲し得られはすまいかと思ふのである。

一、佛教の廣義に於ける支那傳來は必しも後漢明帝の使節派遣には始まらずして前漢中葉以後、少くとも成帝哀帝の間には既に私的交通によりて之が渡來し居りしと思はれ、又外國僧侶も一二は間行渡來し居りたるものには非ざるなきやてふ疑問。

二、從つて當時の佛教は折柄勢力有りし黃老神仙説の壓迫に遭ひ、公々然として立つ能はざりし結果、表面は黃老神仙説に假託し、其の假面を蒙りて暗々裏に其の潛勢力を養ひ居た

るに非ざるなきやてふ疑問。

三、明帝が迎佛使節派遣の動機は決して金人を夢みたるに依るてふ淺薄なるものには非ずして、帝并に一部人士の佛教に對する相當の知識ありて、其の佛説聽聞希望の熱心なる結果少くとも數年間の考慮を費して後此の擧に出でたるものに非ざるなきやてふ疑問。

四、所謂白馬寺は建立當初はかゝる名もなく二沙門を賓客として遇し、併せて經文の翻譯事業に従事せしめむが爲の一個の賓館に過ぎざるものにして、此處に佛像香燭を具備して諸人の祭祀禮拜せしものには非ざりしならむてふ疑問。

五、其の白馬寺と命名又は稱呼せられ佛像を安置して諸人の焚香禮拜する今日の意味に於ける佛寺となりしは後漢中葉以後より西晋迄の間

に於いて起りしことに非ざるなきやてふ疑問。

問。

六、尙又其の建築に飛塔を加へしも恐くは其の

今日の意味に於ける寺院となりし頃のこと

して、明帝が此の一構の建築を營造せし時に

はこれなかりならむも、北魏時代の様子よ

り逆推すれば比較的古くより外國傳來の植物

等の其の庭に植えられて、比較的外國的就中

西域印度的色彩の存せしものなりしならむて

ふ疑問。

七、少くとも南北末期には既に此の寺が湮滅荒

廢に歸し居りたるものに非ざるなきやてふ疑

問。

（大正八年七月十九日稿）

雜纂

風俗史上より見たる後水尾上皇と東福門院

櫻井秀

江戸初世の宮廷風俗を考へんとするときは、何

人も後水尾院の御趣好及東福門院の御性行と更に

その背景をなせる武家の勢力を觀過し得ざるべ

し。然れども本問題を少しく委曲に涉つて叙述せ

んがためには一卷の成書を以てするにあらずんば

盡すべくもあらず。故にたゞ左の重要なる二三の

點のみについて所見の梗概をあげ、諸士の教を俟

ち改めて細説するの機會を得んことを期す。